

カ七方面軍野戦貨物廠部隊略歴

カ七方面軍野戦貨物廠長 永野博夫

年月日	概	要
昭 二六 七、一五	南支那広東に於てはカ二十五軍野戦貨物廠編成後仏領印度支那西貢に連駐同地に在りて補給業務	
一〇、二五	編成改正によりカニ上野戦貨物廠と改称 南方軍總司令官隷下に入る。依然一西貢に在りて補給業務	
一八、一、二〇	編成改正により 南方軍野戦貨物廠と改称 「シンガポール」に転進し「ビルマ」「ジャワ」「スマトラ」及「マライ」地区補給業務	
一九、五、二〇	カ七方面軍野戦貨物廠と改称	
至 二一 六、七、一五	カ七軍司令官の隷下に入り主として「マライ」地区補給業務 損耗人員別紙の通 征代部隊長名 政陸軍主計大佐 平田 亀 陸軍主計大佐 永野博夫 部隊事情精通者 住所 大阪市南区藍町通一ノ二 陸軍主計大尉 西沢貞雄 岡山県真庭郡川上村大字東茅部六六一 陸軍主計中尉 井上繁光 京都府興謝郡野間村須川二八五五 陸軍専任嘱託 坂江宮吉	

マライ内

年月日	概要	要
	<p>備考</p> <p>南方軍築城部に転属以後の丁史は「以下参考」として記載せり（転出入者名        兼も同様）</p> <p>正代部隊長名</p> <p>ノ 陸軍火佐 井上 冲次</p> <p>ス ヲ 今中 太一</p> <p>3 ヲ 中佐 坚田 順</p> <p>部隊争情精通者</p> <p>陸軍中尉 秋山 正志 山口泉徳山市佐茂町三一三一</p> <p>〃 兵長 岩田 豊 〃 下関市大字関後地村一四七三</p>	

カ七方面軍司令部略歴

年月日	概	要
昭和四、五 一五	編成下令 旧南方軍總司令部の人員を主体とし昭南に於て編成完結 司令官 大将 土肥原賢二 尔後昭南に在りて隸指揮下部隊を統率す 方面軍の作戦地域は主として馬來、スマトラ、ジャバワ、及びボルネオに亙り 「ボルネオ」は一時總軍直轄となりたることあり。	
二〇、四一五 八一五	終戦 司令官交代 新司令官 大将 板垣征四郎	終戦と共に作戦地域所在の全陸軍部隊を次で英軍命令に依り海軍部隊をも併せ指揮す
九初旬	英軍の進駐に伴い司令部を南部馬來「レンガム」に移駐し終戦処理に任ず 司令部の一部を先発隊として「レンバン」島に移駐す	板垣大将の東京召喚に伴いカ三航空軍司令官中將木下敏方面軍司令官を代理す
二、四 七	方面軍主力の内地送還並に木下中將の南方軍總司令官代理就任に伴い「レンガム」に於て方面軍司令部の機能を停止す 尔後參謀長中將綾部楠樹以下の基幹人員は主として新嘉坡残留作業隊の指揮に任じ	

(3)

1644

年月日	昭二二二二二
概	<p>最終船に依り佐世保に上陸し復員を完結す          部隊の事情精通者          茨城泉壁那大回村大字高森（大塚源三郎方）          東京都目黒区下目黒四ノ九五四          吉永一次 広沢剣師</p>
要	

昭和

(2)

1645

オ七方面軍野戦自動車廠略歴

年月日

概

要

昭天七、一六

南支那派遣軍命令に依り南支那東南支那野戦自動車廠に於て方二十五軍野戦自動車廠編成完結す

編成 廠長 陸軍少佐 斎藤一雄

編成人員 將校以下約 三三六名

七、一九 南部仏印進駐の爲に東省黃埔港出帆

八、六 仏印西貢港上陸

東嶽本廠を西貢——「シヨロン」中間地区に設置し閑火尉以下約三〇名を「サンジャック」に分遣 同地に作戦用燃料並に車輛部品を累積すると共に南支那野戦自動車廠海防出張所の業務を継承す 廠の編成左の如し

本廠

本廠内

補給部  
修理部  
警備中隊

出張所

「サンジャック」出張所  
海防出張所

南方作戦の進展に伴い南方軍命令に依り、廠の編成改正を実施せらる。

マライニ内

年月日	概要
昭一六、一〇、三五	<p>新に内地及中支軍よりの増強人員左の如し</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一、 姫路輜重兵方五十四聯隊 四三〇名</li> <li>二、 近衛輜重聯隊 四〇〇名</li> <li>三、 中支軍よりの人員未着 三九八名</li> </ul> <p>南方軍直轄カニ十一野戦自動車廠編成完結す</p> <p>編成 廠長 陸軍中佐 有藤俊男</p> <p>編成人員 持杖以下 一、五六五名</p> <p>廠の編成左の如し</p>
部隊の行動	<p>廠本部</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本廠内             <ul style="list-style-type: none"> <li>補給部</li> <li>修理部</li> <li>勤務部</li> </ul> </li> <li>移動修理班             <ul style="list-style-type: none"> <li>カ一 移動修理班</li> <li>カニ</li> <li>カ三</li> </ul> </li> <li>出張所             <ul style="list-style-type: none"> <li>「サンジャック」出張所</li> <li>海防出張所</li> </ul> </li> </ul>

要

一六一三、一

依然本廠を西貢に置き、オーストラリア方面に進軍準備中の各部隊に  
対する車輛の整備補給燃料の集積に任ずると共に、オーストラリア隊に追  
隨進軍せしむる如く、オーストラリア隊の修理工班を、オーストラリア地区に待  
機せしむ。末着、オーストラリア軍よりの人員三九八名到着、大々各隊の欠  
員を充足し、対戦準備に全く完了す。

一三、八

一一時五十分頃、オーストラリア軍に対する宣戦の大詔が発せらる。  
本廠に於ては西貢附近の非常配置に就くと共に、敵産重要施設の接收を  
実施せり。又、オーストラリア方面作戦中のオーストラリア軍に対する補  
給緊急を要し、オーストラリア方面にラレト向け敵の空爆下を突破、牽  
引者を附し、補給資材の輸送を実施せり。

一三、五

オーストラリア軍移動修理班は、オーストラリア軍司令官の隷下に入り、  
仏印泰國境を突破

一三、八

盤谷到着

一七、一、四

オーストラリア軍、國境通過、オーストラリア軍作戦に参加中のオース  
トラリア軍諸部隊に対する車輛燃料の補給を実施し、ついで遺棄車輛の集積に  
任じ、

一三、三

オーストラリア軍、オーストラリア州に到着、オーストラリア軍がオース  
トラリア軍に攻め寄せられたる同攻め作戦に参加、オーストラリア軍歩兵  
部隊と共に進軍、特にオーストラリア軍にノルマントン貯油タンクの  
極大に對しては、之が消火に全力を傾注、能くその任を全うし、軍の  
今後の作戦を容易ならしめたり。

一三、三

オーストラリア軍作戦及びオーストラリア軍がオーストラリア軍に攻め  
寄せられたる同攻め作戦と二回に亘り、当時のオーストラリア軍野

年月日	概要
昭一七、三、上旬	<p>戦自動車隊長高屋大佐より移動修理班長に対し殊勲その功績現認書送付ありたり</p> <p>作戦終了後は反転して修理班主力を盤谷に置き「ビルマ」方面に対する補給基地としての業務を続行す。</p> <p>泰國に連臺待機中のオ三移動修理班はオ十五軍司令官の指揮下に入り盤谷を出発「ピサンローク」を通過「 送し「フ」突破 「ビルマ」 「トング」飛行場に着へ此処に於て犠牲者を出せり</p> <p>敵空壕下此処に於て一応部隊の整備を完了、オ十五軍の北上作戦に参加「マングレー」到着、同地に修理班主力を置き一部を「ラシオ」及雲南州「 「河畔掘町」地区に進出せしめ修理補給に任せしむ。</p> <p>西貢本廠に於て編成せる古川中尉を長とする符命南貢支隊は盤谷に待機中なりしが</p>
三、中旬	<p>行動を起し</p> <p>南貢に突入、同地に在りたる遺棄車輛の蒐集に任ずると共に一部をして「 島にある貯油「タンク」を迅速に接收し前送困難なりし「ビルマ」作戦中のオ十五軍に対する燃料の補給を容易ならしめたり。又一部を「アキヤブル」方面に進出せしめ本来の任務遂行に努力す。</p>
三、初旬	<p>行動を起し</p> <p>南貢に突入、同地に在りたる遺棄車輛の蒐集に任ずると共に一部をして「 島にある貯油「タンク」を迅速に接收し前送困難なりし「ビルマ」作戦中のオ十五軍に対する燃料の補給を容易ならしめたり。又一部を「アキヤブル」方面に進出せしめ本来の任務遂行に努力す。</p>

マライニホ



七、三初旬

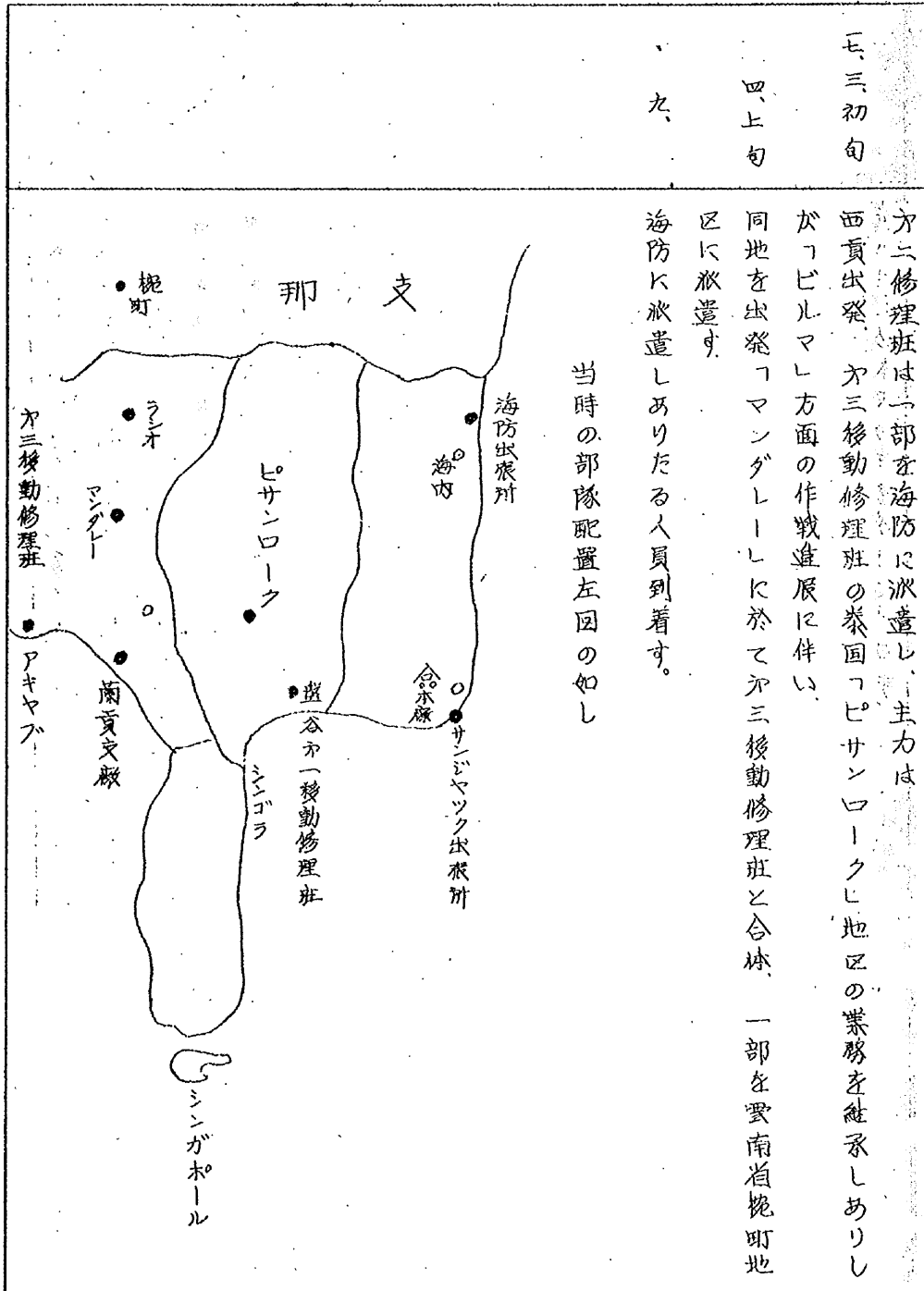
四、上旬

九、

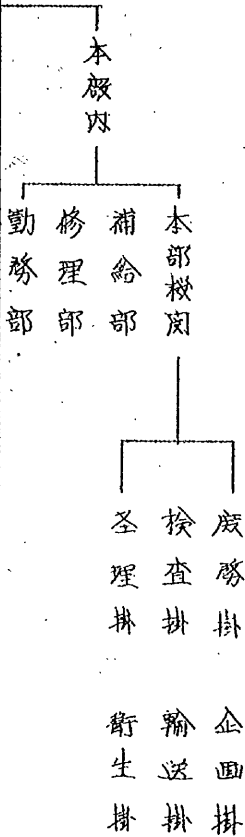
カニ修理班は一部を海防に派遣し、主力は西貢出發。カニ移動修理班の泰國「ピサンローク」地区の業務を継承しありしが「ビルマ」方面の作戦進展に伴い、同地を出發「マングレー」に於てカニ移動修理班と合隊、一部を雲南省「槐町」地区に派遣す。

海防に派遣しありたる人員到着す。

当時の部隊配置左図の如し



年月日	概
昭二七、三、二五	<p>新内地より約六〇名の増強人員到着、夫々各隊に配属す</p> <p>部隊長更迭 新部隊長 陸軍大佐 岩岡幸作</p>
八、一	<p>「サンジヤック」出張所は任務終了撤収す。</p>
九、初旬	<p>海防出張所は業務をカ二十一師団に申送撤収す。</p>
〃	<p>蘭貢支廠増強要員を出発せしめたるも途中軍命令に依り変更「シンガポール」に出張所を設置す。</p>
一三、九	<p>編成改正下令</p>
一八、七、九	<p>(1) 編成改正に依り「コビルマ」派遣部隊をカ十五軍に転属せしむ。</p>
一八、七、九	<p>(2) 本廠を「シンガポール」に移駐すべく主力の移動を開始す。</p>
一八、七、九	<p>(3) 主力「シンガポール」に到着、カ二十五軍カ二十三野戦自動車廠の業務を継承す。</p>
一、二〇	<p>(4) 新にカ二十三野戦自動車廠より約六〇〇名編入す。</p>
一、二〇	<p>南方軍直轄南方軍野戦自動車廠編成完結す。</p>



マニラ三内

<p>一八 ニ 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百</p>	<p>四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百</p>
<p>四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百</p>	<p>本廠</p> <p>後動修理班</p> <p>カ一 後動修理班</p> <p>カニ</p> <p>カ三</p> <p>支廠五所</p> <p>盤谷又廠</p> <p>西貢</p> <p>クアラランフォル支廠</p> <p>クライレ支廠所</p> <p>クノンペン支廠所</p> <p>陸上勤務カ一。七中隊の一々小隊警備として配属せらる。</p> <p>右の編成を以て依然南方軍直轄自動車廠として南方各軍に対する車輛部品、燃料の補給に任ず。</p> <p>カニ移動修理班を泰國北部に派遣在該地区諸部隊に対する車輛整備に任せしむ。</p> <p>地上及航空燃料の統一補給態勢確立に伴い燃料補給部を新設すると共に「スマトラ」に「パレンバン」に燃料業務を主とする出張を開設の為上口中尉以下約七〇名を派遣し昭南及「パレンバン」に於ける「ドラム」修理製造業務を航空補給廠より継承し統一業務を開始す。</p> <p>カ一 後動修理班は盤谷支廠長の指揮下に入り泰國に於ける各部隊の整備に任ず。</p>

マライ三外

年月日	概
	<p>カニ後動修理班（フクアラ、ランフォル）支隊配属の一々小隊を除くは西貢支隊長の指揮に入り仏印各地に在る諸部隊に対する整備に任ず。</p> <p>盤谷、西貢、クアラ、ランフォル、各支隊は後動修理班の援助を受け当該地区に於ける車輛整備並に燃料の補給等支隊の任務完遂に努力す。</p> <p>部隊の配置左の如し</p>

一八五	<p>「ビルマ」方面軍の動き活発となり内地及各地区より「ビルマ」に前進する部隊激増し「シンガポール」本廠、西貢及盤谷各支廠の業務繁忙を極めたるも何等の支障も無く之等部隊の前進を容易ならしめたり。</p>
六	<p>情況に依り本廠疎開の爲建設駐を設け新集積場の建設を始む。</p>
七	<p>「ニッサン」新車組立作業を曰産社をして開始せしむ。</p>
九	<p>カ一次初年兵補充員到着す</p>
一〇	<p>カ二次初年兵及既教育（再応募者）補充員到着す</p>
一一	<p>カ三次初年兵補充員到着す</p>
一九一	<p>カ四次初年兵補充員到着す</p>
二〇	<p>本廠新集積場に疎開を開始す</p>
三下旬	<p>南方軍命令に依り「アングマン」ニコバル」方面に作戦中の戦車カ十三聯隊の車輛整備の爲本廠に於て修理班を編成敵潛出没する同島に派遣車輛整備に任ず（この時敵潛の爲犠牲者を以す）</p>
五二〇	<p>四次に亘り到着せる初年兵を各隊に配属交代帰還者を昭南に集結せしめたるも「ビルマ」方面の作戦進捗せず。昭南の重要度益々其の度を加へ来るを以て交代帰還中止せし該人員を以て昭南本廠及「パレンバン」地区を増強し対空戦車準備を急ぐと共に該人員の一部を以て現地人自動車整備員養成所（終戦前は南方軍技術部下士官候補若隊と改称）創設す。</p> <p>軍令陸甲カ五十一号に依り昭南にカ七方面軍新設せられ其の隷下に入りカ七方</p>

年月日	概
昭和九	<p>面軍野戦自動車隊と改称せられたるも依然前配置を以て業務続行す 河合中尉の指揮する後勤修理班一ヶ分隊（二〇名）を「ボルネオ」軍の指揮下 に入らしむ。</p> <p>敵の反響此の頃より益々熾烈を加へ来り内地よりの追送資材の入手益々困難と なり方面軍は各補給廠に対し現地自活を命ずると共に防空施設の完備を命ぜら る。</p> <p>敵の現地自活状況並に集積場防衛強化作業状況 廠は昭和十八年九月より再生部を新設し現地自活及防空施設を実施しありた るも軍命令に基き其の規模を拡大すべく全力を傾注す</p> <p>(1) 現地自活に就て</p> <p>(1) 本廠に於ては再生部を製造部に改め車輛の再生を強化すると共に部品製 造工場施設に着手す</p> <p>(2) 燃料補給部は於ては廢油再生工場を建設廢油再生に努力す</p> <p>(3) 既に着手しありたる「マライ」「コタチンギ」「ロンボン」製材工場の 拡充作業を「マライ」共産軍と戦い乍ら強行に実施す （此の向若干の犠牲者を出せり）</p> <p>(4) 現地自活用重要物資蒐集のため「マライ」全地域に巡回に亘り資材蒐集 班を編成派遣其の成績顕著なるものありたり。</p>

<p>二〇、 四三三  四、三〇  五、一〇</p>	<p>二〇、</p> <p>(4) 廠管理工場として昭南転進後速かに着手しありたる蓄電池工場は既に試作の域を脱し多量生産を実施しつつあり</p> <p>(5) 「ドラム」不足を補う為大阪鉄板株式会社に資材を貸出全能力を挙げて製作に従事せしむ</p> <p>(6) 「ドラム」不足を補う為野崎木樽をして盤谷より「ク」材を取寄せ代用「ドラム」(木樽)を多量生産せしむ</p> <p>(8) 其の他自動車部製作用工場多数を援助管理し軍の要求に応じつつありたり</p> <p>(b) 集積場の拡張に就て  補給部の車輛部留集積場燃料補給の燃料集積場等を更に分散し地下及半地下格納施設に全力を傾注す</p> <p>(c) 各支隊も本隊命に基き之が徹底的作業を実施せり</p> <p>初め、カニ移動修理班主力(班長の指揮する一小隊)を「ビルマ」方面軍に協力の為「ラングーン」に派遣す。又「マライ」昭南地区防衛の為「ジャバ」スマートラシ方面よりの転進部隊激増し廠の業務益々繁忙を極めたるも之が完遂に努力せり。</p> <p>盤谷支隊はカ三十九軍野戦自動車隊として独立す</p> <p>西貢支隊はカ三十八軍野戦自動車隊として独立す</p> <p>「クアラランポール」支隊はカ二十九軍野戦自動車隊として独立す</p>
------------------------------------	---

(15)

年月日	昭二〇七下旬
概要	<p>戦勢益々我に不利となり敵の上陸必至となりたるを以て方面軍は昭南防衛司令部を設置、当隊も防衛に關し防衛司令官の指揮下に入り昭南西地区の防衛を担当、西地区司令部をブキテマシに設置、岩岡大佐司令官となり司令部及臨時独立歩兵大隊を編成配属の他部隊を併せ指揮し昼夜兼行對戦準備に邁進す</p> <p>西地区隊の編成左の如し</p> <div style="text-align: center;"> <p>臨時独立歩兵第二大隊</p> <p>挺護中隊</p> <p>歩兵三々中隊</p> <p>迫撃砲中隊</p> <p>戦車中隊</p> <p>自動車中隊</p> <p>後動修理班</p> </div> <p>司令官 西歩兵第一大隊（造兵隊）</p> <p>（司令部）</p> <p>西歩兵第二大隊（船船隊）</p> <p>西歩兵第三大隊（船船隊）</p> <p>西歩兵第一中隊（野便隊）</p> <p>西歩兵第二中隊（病馬隊）</p> <p>西歩兵第三中隊（陸上勤務第一〇七中隊）</p> <p>「パレンバン」支隊は軍令に依り引上げ右編成に編入さる</p>

アライ四外

0001

(16)

1657



二〇、八一四  
八、三〇

終戦の詔書発布せらる  
本部各隊は申継責任者及一部警戒兵約一五〇名を残留し、主力をコテンゴール  
集結地に集結を完了

証代部隊長名

- (1) 火佐 音藤一雄
  - (2) 中佐 青藤俊男
  - (3) 大佐 片岡幸作
- 部隊事情精通者

長崎県北松浦郡宇久神浦村  
栃木県上都賀郡日光町五六

陸軍大佐 片岡幸作  
陸軍大尉 塩田仙市

カ七方面軍野戦兵器廠部隊略歴

陸軍大佐 吉野芳三

年月日	概	要
昭五、五、二〇	南方軍野戦兵器廠をカ七方面軍野戦兵器廠と改称 尔来馬求警備並に野戦兵器廠業務	
	還送遺骨宰領者原隊復帰の爲内地出發後消息なし 下士官一名	
	比島向兵器廠宰領者出發後消息なし 兵一名	
	ボルネオ向兵器廠宰領者出發後消息なし 兵一名	
	内地還送遺者出發後消息なし 兵一名	
	北緯十四度十分 東經百十七度二分の海上にて便求せる輸送船沈没 兵一名生死不明	
	二十四時頃マライゴジヨホールバルシにて兵一名逃亡	
	二十三時頃マライゴジヨホール市にて兵一名逃亡	
	本期間補給業務続行中空襲に依り戦死せるもの左記の如し	
	兵二名（南部仏領印度支那西貢）	
	兵一名（恭回）	
	兵器輸送宰領中溜水繼の攻撃を受け戦死せるもの	
	兵一名	
	本期間中病死せるもの	

マライ五内

下士官以下十三名

正代部隊長名

陸軍大佐 吉野芳三

部隊事情精通者

富山県下新川郡内山村字奈月

日本發送電社宅

岡山県岡山市四番地九

技術大尉 植賀博  
陸軍中尉 前原久一

カ七方面軍患者輸送方六十一小隊部隊略歴

小隊長 杉本辰男

年月日	概	要
昭二九、三、 一〇七	動員下令 編成完結	
一七、一、二 三三	泰ヲシンゴラシ上陸 新嘉坡上陸、木彼昭南島に於て還輸並に矢站衛生業務	
一八、三、 二二	兵一名昭南南方方一陸軍病院兼紫分院に於て戦病死(腸チフス) 将校一名昭南南方方一陸軍病院に於て戦病死(頭部挫傷外)	
一九、一、 七	兵一名昭南南方方一陸軍病院兼紫分院に於て戦病死(赤痢) 正代部隊長名	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>一、大尉 泉谷 巖</li> <li>二、大尉 杉本辰男</li> </ul>	
	部隊事情精通者	
	熊本県葦北郡田浦町大字田浦三五三〇	軍医大尉 益田 学
	鹿児島県瀬於郡財部町大字下財部六八三	衛生准尉 安藤武雄
	〃 日置郡市来町大字川上九三七	衛生准尉 田中善之助
	熊本県球磨郡阿蘇村大字宮原一〇〇六	曹 長 土肥七九郎

マライイ五外

南方軍下士官候補者隊部隊略歴

大尉 三浦嘉六

年・月・日	概	要
昭一七、一〇、三〇	「マライ」昭南にて編成完結	
二、	「マライ」 「ネグリセンピラン」州ポートデイクソンレに移駐	
昭一八、一〇、	下士官候補者（当隊第一期）教育	
至一九、一〇、	「」 「カ二期」	
二〇、一、	「カ三期」入隊	
三、	幹部候補生内地陸予士より轉属	
六、	卒業	
七、	幹部候補生入隊尔来下士官候と共に当隊に転属	
	歴代部隊長名	
	カ一代 大佐 小崎四郎 (二八期)	
	カ二代 同 羽賀芳夫 (三〇期)	
	カ三代 同 鈴木善康 (三三期)	
	部隊争精精通者	
	東京都世田谷区代田一ノ三六六 部 隊長 大佐(二) 鈴木善康	
	官城原栗原郡若柳町下町三 副 官 大尉(一) 三浦嘉六	
	新泻県西頸城郡能生村大字下倉六三〇ノ二 前副官中隊長 池田徳活	

南方オ三陸軍病院部隊略歴

病院長 島津忠預

年月日	概	要
昭一七、八、三一	カ百四兵站病院編成改正に依り泰園盤谷より転進	
九、一五	馬來「ジヨホール」州「ジヨホール・バル」に於て陸軍病院開設	
一九、四、二	馬來「ジヨホール・バル」に於て看護婦長末ミツ子戦病死す	
九、三九	馬來「ジヨホール・バル」に於て衛生上等兵榎島紫一戦病死す	
一〇、三ハ	馬來「ジヨホール・バル」に於て衛生上等兵原田一雄戦病死す（匪田蒙蜜）	
九、二七	南支那海に於て海没死（軍医大尉山名勲司衛生伍長池田実（還送患者護送途中）	
一〇、一〇	衛生准尉本原慎一（内地還送中）	
一三、三	馬來「ジヨホール・バル」に於て衛生兵長船垣正茂戦病死す	
二〇、一、ハ	馬來「ケタ州」スンガイバタニシに於て衛生兵長守先吾作戦病死す	
二、一、六	「スマトラ」島に於て衛生兵長木村勇戦病死す	
三、二八	馬來「ジヨホール・バル」に於て衛生伍長胡井輝明、衛生兵長佐藤保戦病死す	
五、一六	「ケタ州」クリムシに於て軍医大尉遠山霞戦病死す	
九、二五	「ペラ州」サラクノースに於て衛生曹長臂次郎戦病死す	
九、一五	「ペラ州」サラクノースに於て衛生上等兵松島喜代次戦病死す	
二一、一、五	「ジヨホール」州「コクルアン」に於て衛生伍長矢代功公病死す	

マライ六内

二二年迄	正代部隊長名 陸軍軍医少付 西山啓吉 島津忠頼
二二、五、以降	部隊事情精通者 玄島原深安那賀又村字八軒屋二番屋敷 衛生産尉 岩手泉宮古市末広町一三の三長倉嘉一郎方 曹長 次田武雄 熊本泉熊本市大江町本七四四 軍医大尉 池田次郎 山口泉防府市大字西佐波令一二二二 齒科医中尉 山内寿夫

南方第一陸軍病院略歴

概

要

年月日	
昭七、三、二五	南方第一陸軍病院は大阪陸軍病院に於て編成完結し
三、二〇	宇田出発
四、六	コシンガホトルに上陸
八	旧ギネラルホスピタル跡に病院開設（六百六十八名及業務継承）す。編成人員将校以下三三三名にして他に日赤救護班三ヶ班（七二名）を指揮下に入らしめらる。
六	市内アレキサンダーロード旧陸軍病院跡に分院（魚紫分院）を開設し主として内科伝染病、精神病患者を収容す
八、三	編成改正ありて将校以下軍人五四二名看護婦長（婦）九二名（十一月到着）軍属四一名日赤救護班三ヶ班（七二名）計七四七名となり南方軍中紀衛生機関として威力を添う
九	マライセラングトル州寿山温泉療養所及マライペラ州ペラ高塚療養所を夫々南方第一陸軍病院より継承し、前者は主として恢復期外傷患者を、後者は主として内科疾患を収容転地療養業務に当らしむ。
一、九、九	市内ヨリナムウカン陸市民病院（都病院及精神病院）を昭南特別市より収受し分院（大和分院）を開設主としてコシンガポール北部の患者及コシンガポール島精神病性病患者の収容に任ず、之によりコシンガポール島の精神病性病患者は全部大和

マライ六



二〇、二	分院に接管す 市内「キングスロード」支那人女学校跡に健兵訓練所を開設し主として外傷後 の機能障碍患者に対する補助器製作及一般恢復期患者の鍛錬に任ぜり 移動治療班を編成し北都「マライ」に派遣し「ヤ」二十九軍司令官の指揮下に入ら しむ
三	防塵班を編成し昭南防司令官の指揮下に入り昭南各州の防塵工作に任ず
四	終戦時病院編成表附表「一」の如し
八二四	終戦により寿山温泉療養所ペラ高原療養所及移動治療班は夫々「ヤ」二十九軍司令 官に隷属せらる
八三二	終戦時防塵班は南方軍防塵給水部に隷属せり
八三七	「ヤ」七方面軍令により臨時看護婦三五四名配属せらる。
一〇	川上軍医大尉を長とする診療班を編成し「ヤ」三航空軍司令官の指揮下に入らしめ 新移駐地「ジ」ヨホル州に移動 レンパン島に集結
二一、六	全頁内地帰還
二〇、八、二四	茨城分院及健兵訓練所を閉鎖し大和分院に合併す
二一	病院主力は旧「ゼ」ネラルホスピタルを閉鎖し軍の集結地と仮定せられたる「ジ」 ユロン「ナ」ヨツ「ユ」カン路に移動し幕舎により終戦処理に任ぜしも軍は「ジ」ヨホ ル州に移駐を聯合軍より命ぜられ当院は大和分院に集結の準備をなし

年月日	概	要
昭三、九、五	大和分院を閉鎖し南方カ一陸軍病院主力は旧大和分院に移駐し旧大和分院職員と共に大和病院を閉鎖。現に収療中。患者の収療及終戦処理に任ず。	
九、五	カ一救護班(長三浦大佐以下五八名)を編成し新後駐地たる「マライ」 「ジヨ ホール州」地区。カ七方面軍司令官、昭南防衛司令官、独立混成カ二十六旅団 長の夫々指揮下に入らしむ	
〇	カ三救護班はカ一救護班に合併し、更にカ一救護班長は日本軍新集結地たる 「レンパン」島に先遣隊(長小室大尉以下八四名)を移駐せしむ。	
二、一、六、一四	迄に小室大尉以下八四名内地帰還す。	
二、一、〇、二四	終戦後病院も各必要部署の配置につき夫々患者収療も軌道に乗りたる感あり、 其の配置の細部は附表二の如し	
二、一、六	カ二救護班は「レンパン」島に移駐し、 未迄に全員内地帰還す	
六三〇	大和病院は聯合軍の立退命令により主力を「シンガポール」 「ニースン」旧知 蘭人病院跡に移動し病院名を「ニースン」日本人病院と稱呼す。	
七、五	「ジヨホール」州「レンガム」に派遣中のカ一救護班は任務終了し 日本人病院に復帰す	
一四	大和病院を閉鎖し夜勤勤務員及入院患者は「ニースン」日本人病院に入る。	
一八	カ一海軍病院 軍医中佐倉八研一以下八八名(内三八名は八月一日内還)は	

マライ七内

八一

当院の指揮下として合体し新嘉坡残留作業隊病院として陣容を整ふ發足す。  
聯合軍の指示に基き病院残留人員二九七名以下の選利人員を内還せしむ。残留  
人員の編成及人名表は附表カ三、カ四の如し

二二、五

病院長細谷軍医少将疾病により内還復員により後任として三浦軍医大佐就任す  
診療及患者に関する事項

当病院は南方軍に於ける中樞衛生機関としてシンガポール全患者及マライ、ジ  
ヤワ、スマトラ、ビルマ方面よりの要特殊治療患者を収療する外、同地区より  
の内地遷送患者の中継収容に任ず。

二七、六

病院開設初頭は病院一箇なりしも  
鉦紫分院

一九、九

大和分院を開設し夫々診療施設完備せるを以て非常収容五〇〇名可能と存る。  
内地よりの輸送船は常に超満員にして船内衛生状況不良の為患者多発し上陸時  
多数の患者を収容するを余儀なくされ亦同時に船内伝染病の発生により之が多  
数収容に当る。

二二、六

終戦直後大和病院は施設概ね良好なりしも英空軍病院及市民病院同施設内浸入  
により遂次縮火せらるる且施設及衛生材料も没収され漸次運営困難となり遂に  
現在地に移転を命ぜられ、アタツノ葺木造平家へ若干腐朽、雨漏ありに診療  
施設を設置せしも建築補修材料なく器械類も喪失せるものを創意と工夫により  
使用し得る如くせり。

年月日

至  
二  
二  
六  
四  
末

二  
〇  
九  
五

概

要

病院開設以来終戦時迄に収容せる患者は總數五二五九名、治癒復帰者三一八一四名、死七八五三名、内地還送一八二〇名に達し、詳細は附表ヲ五、六の如し。

収容せる患者は總數一八〇一三名、治癒復帰者九一〇六名、死亡二一二名、内地還送七六二八名にして詳細は附表ヲ七、八の如し。

病院職員ノ戦(傷、病)死ノ状況

職員中伝染病患者看護中感染之に因り死亡せるもの一名、患者護送の爲内地に出張中のもの反日赤救護班交代の爲患者護送を兼ね輸送船にて南支那海を航海中敵軍飛行機により爆撃、遭難せる者二〇名、赴任途中輸送船遭難海没せるもの一名、終戦直後部隊移動(方一救護班)途中暗夜路傍に休息中自動車により難死せるもの二名、其の他による死亡六名等にして詳細は附表ヲ九の如し。

聯合軍との関係

一 概

病院は終戦時約三〇〇〇の患者約五五〇の女子軍属(看護婦一九三名を含む)を擁し、トシガホールに孤立せる爲

英印軍上陸以來殆んど単独にて局地接戦を継続し患者及婦女の擁護に遺憾なきを期したり。

当初は尖鋭化せる英側の感情的処置に辛味を嘗め、次いで危殆なる施策に対す

マライ七外

三三四三〇

対策に苦心しつつシンガポール日本人病院として英軍管下に亘り聖なる職務の遂行に邁進せり。

英側責任者

三三四三〇

英印方二師団軍医部長（氏名不詳）

三三四三〇

シンガポール管区軍医部長 *Col J. C. Coates A. B. M. S. Singapore Kuala*

三三四三〇

シンガポール管区軍医部長 *Col J. H. C. Walker A. D. M. S. Singapore Kuala*

赤十字条約履行状況

英側、感情亢進期に在りては只管人道的見地より患者保護を歎願し感情冷却し理性の回復するに及ぶ逐次赤十字条約の履行要請交渉を反復せるも言を左右にし最終内遷時期の切迫に従い漸く諸待遇改善の微ありたるも十分ならず完全なる赤十字条約の履行は遂に実現せられず。

以下病院待遇に関する数例を述べれば左の如し。

糧食

三三四三〇

患者食として三〇〇〇の患者に対し生野菜一日平均約七〇〇斤補給を開始

三三四三一

英側より日本側に対する食糧補給開始 職員患者共に一日一四〇〇カロリー

（基本定量）

三三四三二

全患の三〇％に普通患者食（約八〇〇カロリー）職員の一〇％に重労働者食（七

〇〇カロリー）給増 五月より普通患者食六〇％に増加

年月日	概	要
自昭二七 三二二	重労働食全職員の増給	全患者の10%に特別患者食(一六〇〇カロリー)増給
四	普通患者に増給	スルファグアニジン一封表注射器数本増給
自二〇 二一七	衛生材料	レントゲンフィルム増給 糸後殆んど要求量を交付せられたるも陳旧品を混じ
自二三 三	あり	正式補給開始さるるも通常請求量の約70%を削減さる。
二一九	建物施設	終戦時日本側にて使用しありし既存病院施設(戦前精神病院)は昭和二十一年一月及同年三月の二回に亘り移転を要求せられたるも強行されるに至らず、大重内遷開始の同年六月に至り遂に現在地に移駐せしめらる。更に
	現駐地より移転を要求せられたるも強硬に反対	遂に中止となれり。
	現施設補修に因しては再々の交渉に拘らず満足すべき援助を与へられず。	
	患者の福祉	一紙に比し特別なる考慮を払われず。
	職員の特遇	再三の交渉に拘らず一般と同様降服軍人として遇せらる。

三八八内

る 主なる不法行為

(1) 糧秣の徴発

上陸当初英印カニ師団より発せられたる「病院諸材料を徴発して可なり」との命令に基き特に病院保有糧秣は大重徴発され蛋白質脂肪性食糧飯に枯渴し結核等の消耗性患者の死亡率増加の因をなせり。  
食糧徴発を強行せるは主として「シンガポール軍政衛生関係者にして

*Col. Walbingtons* M.O

*may bottle*

M.O の二名なり

(2) 婦女子への強迫

(1) 婦人通訳を院外にて使用せんとし拒否されるや庶務科長の命令違反の科により収監すると該通訳を強迫し約三時間「ジ」に同乗せしむ  
同人は「シンガポール管区（カニ地区）救時停廃係持校にして *may*  
*allan* と称し旧日本側洋虜なり。

(2) 隣接英空軍病院に宿泊せる一符校夜中酒気を帯び病棟に來たり目直視  
護衛に拳銃を向け強迫せるも曰本側衛兵の機智により未然に終りたり  
本問題は英側にて軍法会議に送送展せる由なり。

(3) 物品供出の私的強迫

時計、写真機、軍刀、衛生材料被服等を私物化せんとして強迫欺満等の  
手段を用い官私物品の供出を強要せしめらるる例数等に違あらず細部は

年月日

概

要

別冊外事日誌の如し(最終引揚時提出)

(四) 其の他

1. 患者擁護 福祉増進等の為実施せる対英請願事項左の如し

(a) 日本例上級司令部の人道及国際法に基く患者擁護観念の不徹底

(b) 英側の赤十字条約履行に關する勝者としての一方的解釈

(c) 救次に亘る英側の公約に反せる内還遅延策に基因せる病院職員の懊惱

歴代病院長

1. 陸軍軍医少将 細見 憲 自昭和一七、三、二五 至昭和一九、三、二二

2. 細谷 清 自 一九、三、二二 至 二二、四、二二

3. 陸軍軍医大佐 三浦外次右 自 二二、四、二二

部隊事情精通者

南方陸軍病院附(病務科長) 医少佐 宮川俊久

福島県久米市西町新金丸五二七

同 (原務科長) 衛大尉 島村辰羊

神奈川県高尾郡海老名町勝瀬小野沢トク方

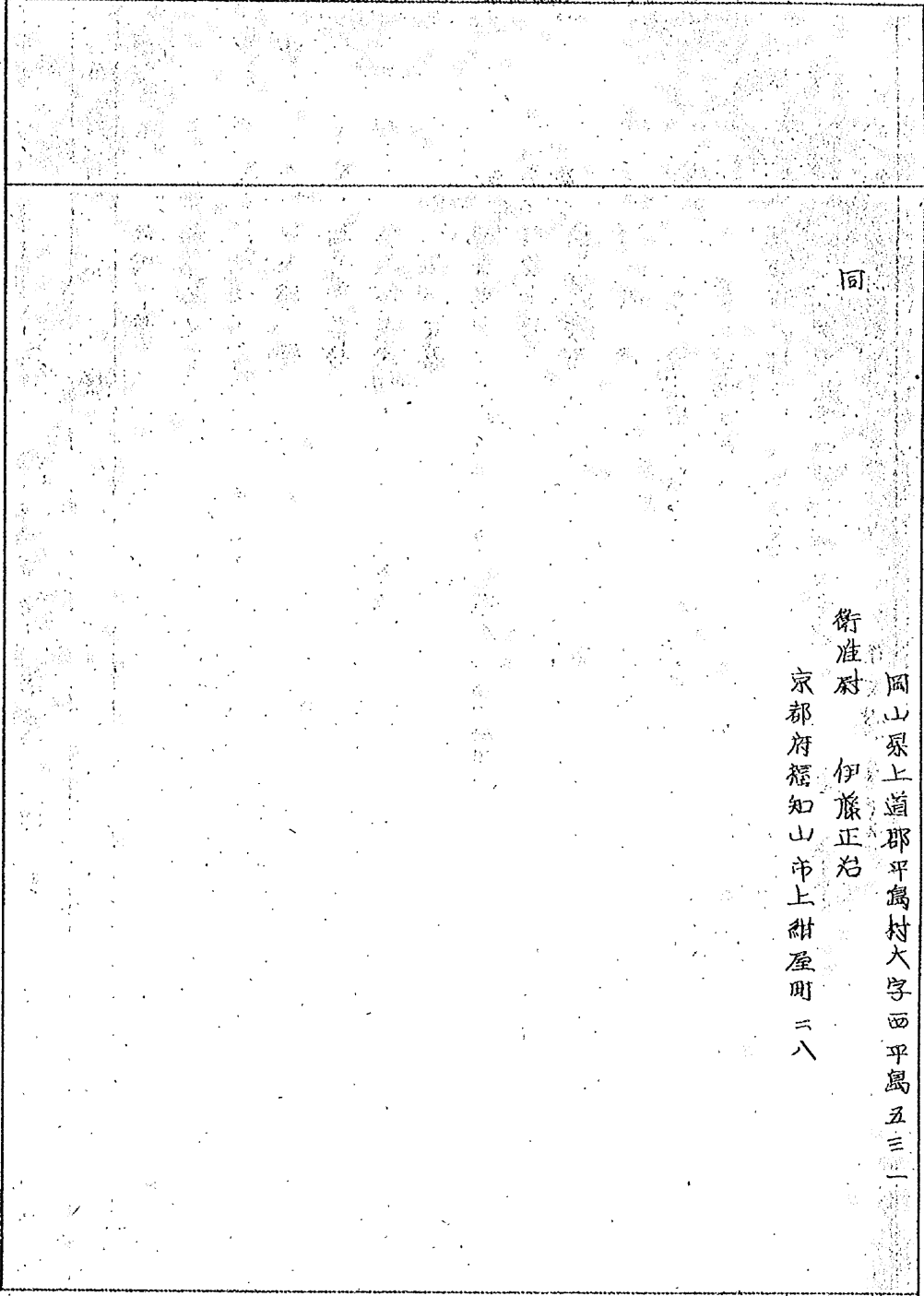
同 ( ) 衛大尉 有泉豊作

山梨県中巨野郡南湖村東南湖三二一八

同 ( ) 衛大尉 岡光雄

マライ入外





同

岡山県上道郡平島村大字西平島五三一  
伊藤正治  
京都府福知山市上紺屋町二八

(33)

1674

陸上勤務方百七中隊部隊略歴

中隊長 柳生三悦

年月日	概	要
昭二六、一〇、二一	編成下令	
昭二六、一〇、二一	編成完結	
昭二七、一〇、二二	待機固業務	
昭二七、一〇、二二	坂出港出発	
昭二七、一〇、二二	輸送固業務	
昭二七、一〇、二二	从領印度支那カムラン湾入港	
昭二七、一〇、二二	バイゴイ上陸	
昭二七、一〇、二二	从印西貢着	
昭二七、一〇、二二	西貢方四十一碇泊場司令部指揮下輸送業務	
昭二七、一〇、二二	西貢出発	
昭二七、一〇、二二	輸送固業務	
昭二七、一〇、二二	昭南島上陸	
昭二七、一〇、二二	方二十三野戦貨物隊指揮下神給業務	
昭二七、一〇、二二	方二十三野戦兵器隊指揮下昭南地区警備	
昭二七、一〇、二二	南方軍指揮下 兵站業務	
昭二七、一〇、二二	方七方面軍隷下 昭南防衛司令部指揮下 兵站並に地区警備	
昭二七、一〇、二二	方七方面軍隷下	

マライ九地

二〇、九、一〇	昭南防衛司令部指揮下
八三一	昭南島ジユロン築結
九、八	ジヨホール州コタテンヤ移駐
九、一二	同 州券真蘭移駐
一〇、三三	同 州千福論移駐
一一、一五	蘭領(リオ諸島)レンパン島移駐
一一、	レンパン島出發
一一、	復員完結
	部隊長名 陸軍大尉 柳生三悦
	部隊事情精通者
	徳島県板野郡撫養町本津丸二九ノ一
	陸軍准尉 毛利一吉
	徳島県板野郡蟹神村吉成字西吉成丸ノ二
	陸軍伍長 佐藤秀雄

独立工兵方四十三連隊部隊略歴

連隊長 陸軍中佐 堅田 順

年月日	概	要
昭二〇、七、五	昭南に於て独立工兵連隊(甲)編成下令	
七、一〇	昭南に於て編成完結 尔後昭南島警備	
八、一四	終戦	
八、二〇	独立工兵方四十三連隊と命下せらる	
九、二	昭南島出發の際連合側に淑服糧秣引継のため「ジユロン」地区に下士官兵二名を派遣 尔後「ケツペル」作業隊として「シンガポール」に在り	
一〇、二〇	「レンパン」島移駐に際し特枝一名「クルアン」検向所に於て連合側に招致せらる	
一〇、三二	「レンパン」島移駐完了 尔後「レンパン」島に於ける交通作業に従事	
三二、四、五	陸軍中佐 堅田 順連隊長に補せらる	
	正代部隊長名	
	連隊長代理 陸軍大尉 高橋 善平	
	連隊長 陸軍大尉 石橋 享二	
	連隊長 陸軍中佐 堅田 順	
	部隊事情通告	
	神奈川県平塚市須賀一五二三	
	陸軍大尉 石橋 享二	

マライ九外

		矢野景城 崎郡竹野村竹野四七八			
		長野景上 伊那郡伊那富村大字辰野五三二			
		長野景誠 訪市大字四賀二五三九			
			陸軍大尉		小林信治
			陸軍中尉		小林正晴
			陸軍曹長		河西安一

才三十四野戦輸送司令部略歴

司令官 上村 栄人

年月日	概	要
昭三、七、一	野戦輸送司令部の編成に關し発令せらる	
七、六	前項司令部要員夫々命課発令せられ司令官着任す	
七、一五	才七方面軍命令に依り昭南輸送隊の編成を令せらる。	
七、八	同隊の編成別紙カ一表の如し	
七、一五	昭南に於て輸送司令部の編成別紙カ二表の如し	
七、二〇	才七方面軍司令官に隸し昭南輸送隊となり昭南及南部コジヨホールレ地区に於ける防衛築城材料の輸送並昭南港揚塔に伴う緊急輸送に任ず	
八、二四	昭南防衛司令官の指揮に入り終戦処理に伴う輸送に任ず。この間	
八、二四	コジヨホールレ、コタチンギレに移動	
九、一〇	コジヨホール州コジユマランレに移駐す。	
九、二	才七方面軍命令に依りコジヨホール州コレンガムレに移駐し南馬來軍司令官の指揮下に入り終戦処理に伴う輸送に従事す	
一三、一五	特設自動車才十七大隊及独立自動車才二百二十四中队主力へ一小隊欠	
三〇	輸送司令部夫々コレンパンレ島に移駐し内地帰還に至る。	
	征代司令官名 大佐 上村 栄人	

マライ一〇内

司令部事情精通者	
熊本市大江町渡鹿五六一	陸軍大佐 上村 崇人
千葉県印旛郡佐倉町宮小路町一三二五	陸軍中佐 松崎 和一
山口県下関市清永町内町一〇二九	陸軍大尉 成瀬 隆 勉
別表第一表	
昭南輸送隊編成表	
司令官 陸軍大佐 上村 崇人	
親下部隊	第三十四野戦輸送司令部
指揮下部隊	特設自動車第三十七大隊
	独立自動車第二二四中队
	第七方面軍野戦兵器隊自動車労務第四中队
	第七方面軍野戦自動車隊自動車労務第五中队
	第七方面軍野戦貨物隊自動車労務第六中队
終戦後臨時に編入せられたる部隊	
親下部隊 南方軍第二野戦補充司令部昭南支部	
光復閣馬求支部	
第三十五軍昭南連絡所	
第三十九軍	
第十五軍	
二〇、八一四	
八二五	

マニラ外

年月日	昭三〇、八、二五 八、二四
概要	<p>ボルネオ守備軍昭南連絡所          指揮下部隊          特設自動車カ十六大隊カ二中队          陸上勤務カ百七中队</p>
要	

1681



独立砲兵第十三聯隊部隊略歴

聯隊長 小原文雄

年月日

昭二〇、八、一〇

概

部隊編成完結

征代部隊長 陸軍大佐 小原文雄

部隊事情精通者

福岡県筑前郡大石村吉川町 陸軍少佐

岐阜県岐阜郡加治田町三五五〇

東京都杉並区堀之内一ノ三〇一

千葉県安房郡大山村奈良林一〇二五

吉瀬大助

石原不二夫

遠藤清太郎

余増武一

要

特設陸上勤務方十五中隊部隊略歴

中隊長 陸軍大尉 總井英一

年月日

昭八、四、一九

概

「スマトラ」島「メダン」に於て編成完結  
 編成官 方二十五軍野戦貨物廠長 陸軍主計大佐 三浦  
 編成人員及差出部隊

要

備考	計	差出部隊人員区分				主計	衛生職		計
		大連尉	中(少)尉	准尉	曹長		軍医	下士官	
編成時未到者	一	一	二	一	一	一	一	二	
	三		一		一			二	
	一				一			一	
	一				一			一	
	一		二		二			二	
	三八		一	三八				二	
	一				一			一	
	一				一			一	
	二				二			二	
	一五 四七		一	一	三			三	
					三八			五	
					五			九	

マライ十一カ

一八、四、二〇	南方軍總司令官命令を以て南方軍總司令部直轄部隊とし南方軍野戦貨物廠長の指揮下に入る
四、二五	南方軍野戦貨物廠長へ陸軍主計大佐永野博夫より持設陸上勤務方十五中隊長は部下を率い速に昭南に前進、部下の教育訓練実施を命ぜらる。
五、一四	中隊長、陸軍中尉徳井英一以下全員「メタン」出版
五、一四	「バラン」出版
一五	「フライ」出版
二四	昭南着、尔後昭南駐泊
至一八、五、二五	教育訓練貨物廠倉庫警備輸送業務に従事す
一八、六、二〇	カ一次兵補六〇名入隊、尔後
至一八、六、二〇	カ一期教育実施
一八、八、三一	カ一期検閲実施
一八、七、一	持設勤務自動車方一中隊、カ二中隊管理業務開始
一〇、一	新に南方軍野戦貨物廠倉庫地区警備担当を命ぜらる
一〇、五	カ二次兵補二四九名入隊、尔後
至一〇、五	之がカ一期教育訓練
一三、三、一	検閲実施
一三、二、七	業務査閲施行
一八、一〇、二〇	査閲官陸軍主計大佐 永野博夫

年月日	概	要
昭和九、三、一	カ一、カ二次兵補カ二期教育訓練実施	
三、一	南方軍野戦貨物廠ヲライ出張所警備要員として下士官以下三三名分遣	
三、八	自活農園開墾開始 傭人を一切使用せず	
七、三	部隊兵力の勤務餘暇を利用す 迄に一万二千坪開墾植付完了	
	甘藷、夕ピオカ、生野菜を栽培し養鶏、養豚を併せ営す	
八、三	カ一、カ二次兵補カ三期教育実施	
八、三	カ三次兵補五六名入隊カ一期教育訓練	
八、三	カ三次兵補カ二期教育実施	
八、三	カ四次兵補八一名入隊 カ一期教育訓練	
八、三	カ一期検閲実施	
八、三	カ七方面軍の命に依り兵補自動車操縦教育実施	
八、三	検閲実施	
八、三	兵並兵補 昭和二〇年度カ一期教育実施	
八、三	昭南港埠頭貨物施設火災につき救援並警備出勤	
八、三	兵並兵補昭和二〇年度カ二期教育実施	

至自	至自
三 一 五	共補自動車操縦教育実施
六 一 五	教育終了 検閲実施
六 一 五	カ五次兵補一〇名入隊 カ一期教育実施
七 二 〇	検閲実施
八 一	カ六次兵補三〇名教育開始
八 一 四	終戦
九 一 五	シंगाム移駐
	歴代部隊長名 陸軍大尉 徳井英一
	部隊事情精通者
	三重県南牟婁郡相野谷村桐原一八五二 陸軍中尉 南 幸次郎
	〃 津市柳山町津興一五〇八 陸軍准尉 山口惣七

(15)

1686

南方軍憲兵教習隊部隊略歴

憲津尉 後藤利正

年月日	概
昭二七、八	編成下令 〃 担任官 芥二戦憲兵隊司令官
八七	〃 着手 〃 完結
八三一	編成地 昭南 編成要領 本部一 中隊二 隊長 憲兵中佐 中山隆礼 副官 〃 中尉 岡村喜千歳(火20) (終戦後任印にて戦死)
一八六、四	中隊長 〃 火佐 高宮 (43) 〃 大尉 益川利久(44) 〃 大尉 谷口清(火16)
一八六、四	馬原在セランゴール州クアラランポール市 中隊長 交迭 憲兵火佐 中村教雄(41)

マラーニカ

一八七	中野重信(47)	昭和十八年度カ一期下士官候補者 名並欠候補者九八名教育を開始す
一三		カ一期兵候補者修業
一九二		カ二期下士官候補者入。名入隊
六		市内東北側无警備隊跡に兵舎を移転す
四		南方各地域(除ジャワ)懸兵隊員中無線技能を有する者を集合、約一ヶ月間の無線探査特別教育を実施す。
五三〇		従来の本部一中隊になりしを
		本部一 中隊四 無線探査教育一二編成改正さる
		中隊長副官更迭
	副官	中尉
	中隊長	憲兵大尉
	無線中隊長	中村万三郎(召)
		菊地隆吉(召)
		藤田 (特志)
六一		無線探査特別教育を開始す
六一〇		カ一期下士官候補者卒業
		カ二期兵候補者 名入隊
		カ三期下士官候補者 名入隊
二二五		カ二期下士官候補者卒業

(47)

1688

年月日	概要
昭五、八、三〇	方四期下士官候補者 名入隊
二〇、八、一四	卒業
九、二	隊長交代 憲兵火佐 谷口 清（火佐）
六、一五	南方軍憲兵教習隊員全員（九四名）はクアラランフル飛行場東南隅共陵ゴム林中に集合を命ぜらる（通称名ブキナナス）
一、二、三〇	武装解除
三、一、八、九	クアラランフル刑務所に収容さる
三、三〇、三、一、三〇	子ヤンギー刑務所に移送さる（全員）
三、一、八	以上の間に数回に亘り逐次釈放され帰還待機のためジュロンに集結す
三、五	セレター出帆
	部隊事情精通者
	兵庫泉飾 魔曾左村六角 憲大尉 山本好太郎 教育関係 長野景上 伊那郡飯島村大字飯島 准尉 北原四郎 岡山泉色久 郡朝日村大字大島 大尉 中村万三郎 全般

マラーニト



南方軍築城部部隊略歴

部長 陸軍大佐 古富敏男

年月日	概 要
昭六、五、	南方軍築城部を関東軍築城部及陸軍築城本部要員を主体とし編成完結。本部を昭南に位置し南方軍に於ける築城並防空に關し計画指導す。
一五、七、	別工隊並指導要員を「ビルマ」 「塚比」 「馬來」 「ジャワ」 「スマトラ」 「比島」 「仏印」各地区に派遣す。總軍比島転進に伴い本部は比島に転進「マニラ」に位置し比島防衛作戰を実施す。
八三一	本作戦中、比島「ミンドロ」島「デルモンテ」岬沖洋上に於て將校「准士官以下一〇戦死す。
二、二五	「ボルネオ」島「ミリ」島沖洋上に於て軍人三戦死す。
二、	總軍仏印転進に伴い部隊はカ十四方面軍の指揮下に入る（在比島人員のみ）
二〇、	「マニラ」より「バキオ」への転進作戰中「ロザリオ」 「ピナロラン」附近戦
二、	斗に於て將校「一、 兵一、 行方不明となる。部隊はカ十四方面軍の指揮を解かれ仏印に転進を命ぜられ部長以下五名転進す。志岐火佐以下在比島人員はカ十四方面軍へ転属せしめらる。転属人員別紙に示す。

年月日	昭三〇、三
概	<p>本部を西貢に位置し総軍より別紙の補充人員を編入し再編を行い仏印全域に於ける防衛工事並に「グラット」に於ける総軍指令部防衛工事を実施す。</p> <p>昭南島防衛強化の爲方七方面軍の指揮に入り、本部は昭南に転進、同地の築城防衛工事の実施並に計画指導をなす。</p> <p>終戦に至る</p> <p>南方軍特種情報部昭南支部堅田中佐以下別紙人員を転属せしめる。</p> <p>各地区派遣人員にして業務不能なるものを別紙の如く各軍部隊に転属せしめらる</p> <p>「ダユロン」に移駐</p> <p>「レンガム」に移駐</p> <p>部隊主力は「レンパン」島に後駐</p> <p>「レンパン」島出発</p> <p>名古屋上陸</p>
要	

(50)

1691